

遊☆戯☆王Limited・force 《リミテッド・フォース》

crt0816_

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

謎のカードを拾った主人公 如月 遊牙は、突然謎の音と共に吸い込まれてしまう。

そして出てきた先はなんと！遊戯王の舞台 童実野町！

さらに、十代や遊星まで?!

シリアスだと思われる、遊☆戯☆王 Limited force(どちらかと言うとラノベ) ぜひ楽しんで見てください！

行こう！その先の光へ！

デュエルスタンバイ！

目次

第0話	伝説の決闘者	1
第1話	轟け！全てを超えるリミテッド！	4

第0話 伝説の決闘者

「ん？なんだこのカード？」

……。

そこには 平行世界への誘い と書かれていた。

……。

『強制転移、発動！強制転移、発動！』

「は？」

ポンっ！

次の瞬間、俺はここにいた。

とても見慣れた景色、いや、見慣れた光景というのだろうか？ともかく、大体の人が知っているであろう場所にいる。

そう。

—童実野町に—

「何が起こったし……」

混乱しながらもあたりを見渡す。

すると、金色のアクセサリー？を付けた男子中学生を見つけた。

「あれって……もしかして」

そう呟きながら、アクセサリーを付けた男子の方に歩いていった。

「じゃあね！城之内くん！」

「また明日な！遊戯！」

フアッ?!

今、明らかに遊戯だの城之内だの言ってたぞあいつら！

……よし！話しかけるか！

「あのー！その人！武藤遊戯さんですか？」

「う、うん。そうだけど、僕に何か用かい？」

「いや、用があつて聞いたわけじゃないんですけど……」

「あ、分かった！僕とデュエルしたいんだね！お店の留守番を頼まれて退屈してたんだー！これで新しく作ったデッキを試せるよ！」

「あ、いや、その」

「？もしかして、ダメかな？」

やべえ、伝説のデュエリストだわ〜勝てる気しねーわ！。
よし逃げよう。

「やりますー！」

は？ナニイテンダオレ？

「それじゃあ、僕の家に来て！」

「こんなことがあればいいなあ、なんて思ったけど、武藤遊戯は見当たらないし、オマケにチンピラに絡まれるし」

童実野町ではあるのだが。

「まあ、頑張つて探すか」

そう。道はあるのだと。

「あなた、ダレ？」

そこには小さな女の子がいた。

「俺は遊牙、遊牙って言ってくれるとこっちも話しやすいな」
そう言うのと

「ユウ……ガ？」

とても弱々しい声が聞こえた。

「そう、ところで君の名前は？」

「……」

黙っちゃったよ！

しかも俺を見つめてキョトンとしてるよ！

「もしかして……ない？」

すると、コクツと頷いた。

これ、名前決めた方がいいのか？でもなあ、そうそう思いつく名前
ねえしなあ。

……。

ピンと来たわ。

「じゃあ、おまえの名前は、日向だ、それでいいか？」

「……うん。」

しかし、ストレートに決めちゃったわ。

なんだよ日向って、いや、本当に見た目と、さつき見た時ひなたぼっこしてたからってこれはアウトだろ。

そんな事を考えてると、服を突然引っ張られる。

「早く、行こ。」

「お兄ちゃん」

「はっ」

突然、俺の事を兄だと思ったのかそれとも何かがあったのか知らんが、1つ言わせて。

すごい恥ずいんですけど。

しかもピッタリくっついてくるんですけど。

てか、その前にデュエルさせろよ！

続く

第1話 轟け！全てを超えるリミテッド！

「美味しいか？」

「おいひいれふ」

「そうか、それは良かった」

……。

「じゃねえよ！やべえよ！これじゃあ幼女誘拐だよ！どうする?!落ちて着け！落ち着くんだけ如月 遊牙！お前はロリコンじゃないだろ?!」

ん？なんか違和感が……。

「ねむいのれふ」

……。ごめん、ロリコンだわ、多分。

そこにはフードをかぶった2人組がいた。

「ここに奴が居る。てか、どこから来た奴なんだ？情報が全くねえよ

?あいつ」

「知らねえよ、ボスの命令なんだしやるしかねえけどさ」

「仕方ねえ、打ち合わせの通りに」

「分かったぜ!」

「合言葉は!」

スウ……。

「B C C K S!」

「おい、日向！起きろく、なんか変な人たちがお前をガン見してるんだよ!」

「嫌なの、怖いの」

「そりや変な仮面被ってるからな、こいつ、デュエルだのなんだのうっせーからちよつとぶっ倒してくる」

そう。俺には、やらなくてはならないこと（デュエル）があるからな。

スツ……。

「さあ、デュエルしようか!」

謎の男達との奇妙なデュエルが始まった。

1ターン目

「俺のターン、ドロー」

うわ、事故った。

「俺はカードを2枚伏せ、手札から ソリッドアロー ハヤテを特殊召喚！」

「なに？特殊召喚だと？」

「このカードは、自分フィールドにカードが2枚以上ある時、特殊召喚出来る！（ターン1だけ）そして俺はターンエンド！」

2ターン目

「俺のターンだ、手札から切り込み大隊長を特殊召喚！このカードは、相手の場にモンスターがいる時、特殊召喚出来るのだあ！ふハツハツハツハ！」

うわあ、うぜえ。

そして

5ターン目

「俺のターン、ドロー！」

カーンコーン！

詰んだ。

やっべえ勝てねえ。

「た、ターンエンドだ！」

6ターン目

「俺のターン、ドロー！場にいる青眼の白龍で、ダイレクト、アタアアアツクツ!!」

どつかで聞き覚えのある声なんだけど。

てか、マジで勝てねえぞこれ、どうするんだよ。

「勝てるの」

……。

「はっ」

「勝てるの、お兄ちゃんは勝つの一！」

そう、駄々っ子のような声を発したこの少女はどうやら、俺が勝てると思ってるらしい。

「でも、このまんまじゃ無理だぜ？青眼の白龍なんて、突破できるわけねーだろ」

「お兄ちゃん、聞いて」

「あ、はい」

やべえ俺が説得された。

「今から私の……私の存在意義を、お兄ちゃんに託すの、その所有権を」

「やめろ！早まるな！よし！わかった！我が会社で雇ってやろう！」

「私は、あんた達から逃げるためにここに来たの、今更帰るつもりはフクザツダナー。」

「ない!!!」

「お、まうだな」

「お兄ちゃん！私と言う存在がこのカードに宿ってるの、大切に扱えば大丈夫だから！だからこのカードを！」

「あーはいはいそーゆー事っすね」

半ば理解出来ていない俺はそれを受け取る。

「は？なにこれ？」

棒が鎖の柄なんですけど……。

「なんだこのカード!?説明しろ！」

「それはリミテッドモンスター、後は頑張っつてねお兄ちゃん！私はフラフラしてきてもう……ら、め……」

チーン。

「日向アアアアはほつといて、とりあえずこのカードを使うか！」

7ターン目

俺は渡されたカードをエクストラデッキに突っ込み、カードを引く。

「俺のターン、ドロー！」

「何をしようと無駄だ、さっさとサレンダーしろ」

「俺は未来を捨てない、捨てた過去があるからこそ！俺は手札からソリッドソード ヤマト を召喚！そして召喚に成功した場合、デッキからソリッドと名のつくカードを1枚手札に加える！俺が加えるの

は、ソリッドアロー ハヤテ を手札に加える！」

「まだ、そこまで腐ってはいなかったか……」

「そしてソリッドアロー ハヤテ の効果で自身を特殊召喚！」

そして俺はエクストラデッキからカードをとる。

「轟け、過去を引き裂く鎖よ！今こそ解き放て！」

「何をするつもりだ?！」

「リミテッド召喚！」

俺は叫んだ。

意味不明な言葉を。

「リミテッド召喚だと?！」

「現れよ、制限士 ヒナタ ！」

「フハハハハハ!!!小僧！まずそのリミテッド召喚を教えろ！」

「リミテッド召喚は1ターンに1度しか出来ず、自分フィールドにリミテッドモンスターは一体しか存在できない！そして！リミテッドモンスターは召喚する時リリースはせず、除外する！」

「なにい！」

「さらにリミテッドモンスター召喚する時に自分フィールドのカードを除外する！また、リミテッドモンスターは破壊された時、召喚に使用した除外されてるモンスターを任意の枚数デッキに戻す！」

「ダアに?!」

「召喚士 ヒナタ は、2体以上のモンスターを除外してリミテッド召喚出来る、またこのカードは召喚時、除外したカードの数×300の攻撃力をプラスする！」

「青眼の白龍は3000！いくら何でも突破できんぞ!!」

「このカードの攻撃力は2500！そして除外したカードは2枚！よって攻撃力は3100となる！」

「まさか！くっ！認めるしかないようだな、彼は我が海馬コーポレーションが認めた最強のデュエリストだと！」

「俺はヒナタで、青眼の白龍に攻撃！バーニング・レイド!!」

「ウガアアアアアア!!」

「そしてヒナタの効果発動！デュエル中、1度だけ破壊したモンス

